

『西鶴諸国ばなし』巻五―四「闇の手がた」再読

――西鶴における自称（それがし）の吟味を通して――

長内綾乃

一、問題提起

井原西鶴『西鶴諸国ばなし』巻五―四「闇くらくらの手がた」は、次のような話である。

今川采女という男が越後で殺人を犯し、女を連れて逃亡する。信濃路の野のはずれの一軒家に一宿を請うが、木曾の赤鬼というあだ名の乱暴者が道中の二人の姿を見ており、女に一目惚れして、仲間とともに覆面して家に押し入り、采女や亭主達を縄で縛って女を弄ぶ。翌日、女の機転で犯人の正体が明らかとなって罰せられることとなるが、采女と女も観念して刺し違えて死ぬ。

以下に、朝を迎えてから結末に至る部分の本文を掲げてみる。

おもひよらざる事、是非にかなはぬ難義にあい、夜の明るを待兼、奉行へ御訴訟申あくるに、なにもとらぬ事の不思議也。ひとりも見しらねば、何を以て、せんさくの種もなしと仰せける。

其時、それがし覚の候へば、此宿中男残らず御前へと申あぐる。

一人ものこらずめされける。女罷出、此内に二三人も、背中に鍋炭の手形あるべしと、かたをぬがして、せんさくするにあらはれて、此中間十八人、せいばいあそぼしける。扱もせはしき中に、女の知恵をほめける。是迄の因果と、夫婦指違へける。（第

二巻、九四ページ）¹

ここで問題にしたいのは、「それがし覚の候へば、此宿中男残らず御前へ」と奉行に申し出たのは誰なのかということ、つまりここにいう「それがし」とは誰の自称なのかということである。

念のため「其時、それがし覚の候へば、此宿中男残らず御前へと申あぐる。」の箇所についての諸注釈書の解釈を一覧すると、次の通りとなる。

1 麻生磯次氏『現代語訳西鶴全集（三）』（河出書房、一九五四年）すると、その時かの女が、「私には覚えがありませんから、この

宿場中の男を残らずお役所へお呼び出し下さいますやうに」と申し上げた。(二〇一ページ)²

- 2 宗政五十緒氏・松田修氏・暉峻康隆氏校注・訳『日本古典文学全集 井原西鶴集 二』(小学館、一九七三年) ※宗政氏担当現
代語訳

その時、「私に思うところがありますので、この宿場中の男を、残らず²奉行の御前へ集めてください」と申し上げた。(一七四ページ)³

- 3 暉峻康隆氏『現代語訳西鶴全集 西鶴諸国ばなし 懐硯』(小学館、一九七六年)

その時、女が、「私に心おぼえがございますから、この宿場中の男を、残らず²ここへお呼び出してくださいませ」と申し上げたので、(二一六ページ)

- 4 富士昭雄氏・井上敏幸氏・佐竹昭広氏校注『新日本古典文学大系 好色二代男 西鶴諸国ばなし 本朝二十不孝』(岩波書店、一九九一年) ※井上氏担当「それがし」脚注

- 5 麻生磯次氏・富士昭雄氏訳注『決定版対訳西鶴全集 西鶴諸国ばなし・懐硯』(明治書院、一九九二年)

すると、その時かの女が、「私には覚えがありますから、この宿場中の男を残らずお役所へお呼び出し下さいますやうに」と

申し上げた。(一三二ページ)

1と5が同文であることからわかるように、麻生氏は一貫して発言主を女と解釈している。5の共著者富士氏も同様の見解を有しているであろう。3の暉峻氏、4の井上氏も同じ立場を取る。残る2の宗政氏は、そもそも発言主が誰かについて言及していない。このように、全体としてはこの「それがし」は采女ではなく女の自称と取る解釈が優勢であるといつてよい。

ちなみに、「僕」・「俺」・「私」・「拙者」など自称として用いられる代名詞にはさまざまなものがあり、それらの中には、性別によって使い分けがなされているものもある。例えば、「僕」・「俺」・「拙者」などは主に男性が用いるのが一般的だ。一方、「私」という自称は男性でも女性でも使われることがある。では、「それがし」という語はどうであろうか。「それがし」という語は、自称で用いられる場合、「もっぱら男性が謙遜して用い、後には主として武士が威厳をもって用いた。」(『日本国語大辞典 第二版』第八卷、小学館、二〇〇一年)とされる。これに従えば、文中において「それがし」を用いて発言をする人物は男性ということになる。しかし、「闇の手がた」では女性の自称と取る解釈が主流である。この齟齬をどのように説明すればよいのだろうか。瑣末なことかもしれないが、この「それがし」云々が誰の発言なのかは、「闇の手がた」の読みにおいて見過ごすことのできない問題であろう。

以下、西鶴の用いる「それがし」の吟味を通して、「闇の手がた」の再検討を試みたい。

二、西鶴の「それがし」

手始めに『新編西鶴全集』第一巻～第四巻を用いて西鶴浮世草子作品中の「それがし」を検索してみたところ、「闇の手がた」の例を含む九十三例^①を見出した。それらを、「男性に用いられたもの」、「女性に用いられたもの」、「性別の特定が困難なもの」の三通りに分類したのが次の表である。

「闇の手がた」は現時点で男女の区別が困難なので、「性別の特定が困難なもの」に入れる。なお、「それがし」の表記には「それがし」「それがし」「某」「某がし」「某し」があったが、区別することはしなかった。

表 西鶴浮世草子作品の「それがし」用例数

		3	諸艶大鑑
		3	好色五人女
	2	2	好色一代女
1		7	西鶴諸国はなし
		4	本朝二十不孝
1		12	男色大鑑
	1	13	武道伝来記
		3	懐硯
		2	色里三所世帯
		12	武家義理物語
		2	嵐は無常物語
1		12	新可笑記
		3	本朝桜陰比事
		1	浮世茶花一代男
		1	西鶴置土産
		1	西鶴織留
		2	西鶴俗つれづれ
		3	万の文反古
		1	西鶴名残の友
3	3	87	合計

「それがし」の用例は九十三例あり、その内訳は、男性に用いられたものが八十七例、女性に用いられたものが三例、性別の特定が困難なものが三例となる。用例の圧倒的な偏りから見て、西鶴も基本的に「それがし」を男性の自称と認識していたことが明らかである。「闇の手がた」の「それがし」を女の自称と見なすことの妥当性は、ごく少数の例外の存在理由が説明された上で改めて問われるべきであらう。

まず、「性別の特定が困難なもの」に属する用例のうち、「闇の手がた」以外の二例を検討する。

① 『男色大鑑』巻八―三「執念は箱入の男」

なを気を付て見しに、是に添状あり。それがし、此あたりの人形屋なるが、此形一しほ心を込て作り、看板に立置し事、年久し。いつの比より、此人形魂の有ごとく、身をうごかしける事たびくくなり。(第二巻、三九七ページ)

② 『新可笑記』巻四―「舟路の難義」

心よく看病いたされしは、是また武士の本意なり。其後祈禱さまくくなれ共、母にしうたん日々につのり、をのくあぐみて、内談とりくの折ふし、物ごとにくふうふかき人のいへり。此病性医療にはかなはし。某がし存するむねありとて、かの息女にいてあひ、其みだれたる心に我もみたれけるに、おのつから此人のいへる言ばを聞入し時、それ程母のなつかしくは、難波

の大寺の神子を呼よせて、冥途の事共口よせて聞給へといへば、大かたならずよろこび、有がたきをしへぞと、是をねがひける時に、神子をまねき、乱人の様子を内証にていひふくめ、梓にかけて呼出す。(第三巻、五五三、ページ)

①の「執念は箱入の男」では、備前の人京の茶屋菱屋で若衆竹中吉三郎・藤田吉三郎らを同座させて遊んでいる時、箱に入った人形が届けられ、その経緯を「添状」にしたためてあった。その文面のなかで「人形屋」が自らを呼称するのに「それがし」が用いられている。「人形屋」とあるだけで、はっきりと性別が書かれているわけではない。しかし、職人である「人形屋」は、よほどのことがない限り、男と見て差し支えないのではないか。

②の「舟路の難義」では、摂津伊丹の城主に仕えていた人の妻が娘を産んですぐに亡くなり、成長してその事情を知った娘が狂乱する。そのとき「物ごとにくふうふかき人」が、「某がし存ずるむねあり」、即ち自分に考えがあるというて、娘と同調するように狂乱しながら娘の本心を聞き、神子を使って亡き母を呼び出し、それをきっかけに娘が正気に戻る。ここで「物ごとにくふうふかき人」の性別は、前後の文脈からも特定することが困難である。それはこの人物の素性が明示されていないからである。よって②は、検討してもなお、性別の特定が困難なものとして分類しておくほかはない。

次に、女性に用いられた三例に目を転じる。そのうち二例は『好

色一代女』巻三十一「妖孽寛濶女」において使用され、残る一例は『武道伝来記』巻一三「嗔嗒といふ俄正月」における宮越十太郎・亀松兄弟の母の発言に見える。

まず、「妖孽寛濶女」について考察していく。『好色一代女』は、主人公の一代女が好色庵にやって来た男二人に自らの生い立ちを語る形式で書き進められている。最初、物語は一代女が好色庵にやって来た男二人に懺悔するのを覗いていた語り手の視点で進行するが、物語が進むにつれて語り手の姿が消滅する。よって、地の文で用いられる「それがし」は、一代女が自分を指すために用いていると見て間違いない。

③『好色一代女』巻三十一「妖孽寛濶女」(一)

銘々に云がちなれども、中々こんな悟気は、御前さまの御氣に入事にあらず。それがしが番に当る時、くだんの人形を、あたまから引ふせ、其うへに乗かゝつて、をのれ手掛の分として、殿の氣に入、本妻を脇になして、おもふまゝなる長枕、をのれ、只置やつにあらざと、白眼つけて、齒切をして、骨髓通してうらみし有様、(第一巻、五五三〜五五五、ページ)

④『好色一代女』巻三十一「妖孽寛濶女」(二)

此女、嬋娟にして、跪づける風情、最前の姿人形のおよふべき事にはあらず。それがしもすこしは自慢をせしに、女を女の見るさへ瞬くなりぬ。是程の美女なるを、奥さま御心入ひとつに

て、愠氣講にてのろひころしける。(第一巻、五五六ページ)

③の例は、奥方と御殿女中たちの愠氣講の時、一代女の番が巡って来た場面である。④は、殿様と奥方についての話をしている時に、奥方が人形を使って呪い殺そうとした国御前と一代女自身の器量を比べた場面である。前後の文脈から判断しても、この「それがし」は語り手である一代女の自称に違いない。

では、なぜ西鶴は、ここで一代女の自称を敢えて「それがし」にしたのだろうか。『好色一代女』の語りでは、一代女の自称として「自ら」や「我」を多用するのが通例である。ただし、「自ら」は身分のある人の人称代名詞とされており、巻一一以外あまり用いられない。一方、「我」は常に用いられている。これらの自称が多用されていることから、第三者の語りの存在が薄れ、一代女の語りで物語が展開されていると感じさせるのであるが、それにしても「妖孽寛潤女」にのみ「それがし」という自称が出現しているのは、やはり疑問といわざるをえない。

一方、『武道伝来記』巻一一三「嗚啞といふ俄正月」において自称「それがし」が使われているのは以下の場面である。

⑤『武道伝来記』巻一一三「嗚啞といふ俄正月」

母のいはく、とてももの事にそれがしが願ひあり。十太郎をよびくだし、是も一所に相果なば、何か浮世に思ひ残す事候まじ。

十太郎生残り、跡にて恨むべき所もあり。日限は名月まで御待

給はれと、都に刻付の早飛脚を立、くはしき状をつかはしける。

(第一巻、四二八〜四二九ページ)

弟の亀松に無礼を働いた岩国家の小者への意趣返しに当主岩国善太夫を討った兄の宮越十太郎が逃亡し、亀松が兄に代わって切腹しようとする場面で、彼らの母親が、十太郎を呼び戻すので亀松の切腹の期日を延ばしてほしいと懇願する。「母のいはく」とあるように、この発言は間違いなく女性のものである。女性の自称で「それがし」を用いることはほとんどないはずなのに、西鶴は女性の発言であることを明示しつつ、母親に「それがし」といわせているのである。

以上五例を吟味してみた。①は男性の可能性が限りなく高く、「男性に用いられたもの」に分類し直してもよいほどである。②は何とも決め手がないので、「性別の特定が困難なもの」に留め置くしかない。そして、③④⑤は明らかに女性の発言として認定しなければならぬ。例外として存在するこの三例を、どのように説明すればよいのだろうか。

三、演じることと「それがし」

「妖孽寛潤女」と「嗚啞といふ俄正月」の二つの話に共通する点から、なぜ「それがし」が女性の自称として用いられているのか考察していく。

「妖孽寛潤女」は、一代女が武家に表使いとして奉公していた時

の話である。まず留意しておきたいのは、「妖孽寛濶女」が、一代女の懺悔の物語として自らの「性」に関することを綴っている『好色一代女』のなかでは珍しく、自らの「性」を起点とした物語となっておらず、前後の章と話がうまくつながらないという特徴を有することである。「妖孽寛濶女」における一代女は、常に周囲を観察している立場をとっており、自らの話をしないのだ。このことを確認した上で具体的な場面の検討に入る。

③の場面で一代女は、奥方の鬱積した嫉妬心を体現するかのようになり、人形の上に乗るかかって罵倒してみせる。まるで奥方になりきったように振舞う一代女は、奥方の機嫌を取り持つために大袈裟な動作で演技をしているといっってよい。また、一代女の嫉妬話は、奥方と一体となって（奥方になりきって）いるということから見ても、他の女たちが自己の体験をもとにして話しているのと根本的に異なる。奥方になりきることで奥方の異常性を強調するとともに、その後の人形が動くという展開の虚構性を演出しているともいえる。④の「それがし」は、一連の出来事の終了後も奥方と同調する形で自分と国御前を比較する文脈で使われており、一代女自身の素直な感懐を表すものではなく、奥方に限りなく密着して用いられた特異な自称といべき例である。

一方、「嗚嗒といふ俄正月」の母親は、「それがし」の自称を使う前の場面で、次に掲げるように武装している。

母の親吉人、藤縄目の鎧を着て、くれなひの天巻長刀の鞘はづして、鞍掛に腰を置いて、一命をしまぬ眼色、いにしへの巴山吹もかくあらんと、見し人いさぎよくほめて、女なればかまはず。
（第二巻、四二六・四二八ページ）

当主善太夫を討たれた岩国家の家中が宮越家に押し寄せるのを、母親は一家を自ら守ろうとする意志を固めて武装して待ち受ける。祐筆を勤める夫の十左衛門の姿が描かれないのは、すでに死去しているからかもしれない。母親は、武装することによって夫の代役を務めている。つまり、ここでの母親は演技をして男になりきっているのである。

以上、二つの話の、自らを「それがし」と呼ぶ女性に共通する点として、武家の関係者であること、他人になりきっていることが挙げられる。なかでも、他人になりきっていること、他人を演じることで、女性が「それがし」という自称を用いる理由になっているのではないだろうか。「妖孽寛濶女」では、男ではないが、奥方という、自分ではない人物になりきっていた。このような状況では、一代女がまるで男のように力強く大げさに演技をすることも、何らおかしくはないはずだ。一代女が自分自身とは全く異なる人格を演じて見せる必要性があったから、自称が「自ら」や「我」から変化したのであろう。

また、「嗚嗒といふ俄正月」においては、母親は夫の代わりを演

じていることがわかるので、「それがし」を自称として用いているもおかしくはないだろう。母親は一時的な武装によって夫の姿を借りたことになる。

自称「それがし」が女性に用いられるときには、彼女たちが演技をしているという共通点が存在しているとみるのがよいだろう。

四、「闇の手がた」について

西鶴の浮世草子で例外的に女性が「それがし」を自称に用いた三例③④⑤は、いずれも発話者が生身の女性とは程遠い他者を演じて見せている場面で使われていた。また、「性別の特定が困難なもの」に分類した①と②のうち、①は男性と見なして差し支えないと判断できたので、②のみが文脈上男女の区別が付けがたい例として残ることとなる。

それでは本題の「闇の手がた」はどうであろうか。

今川采女と女が木曾の赤鬼率いる乱暴者たちに暴行されて、翌日奉行所に訴えに行く場面で「それがし」が用いられていた。乱暴者たちの背中に鍋炭の手形を残したのは女であるが、「それがし」の自称を用いたのは本当に女なのであるか。とっさの機転を利かせることができる、機知に富んだ女であるが、奉行所に対して訴えたのも女であると、多くの注釈書の解釈のように決め付けてよいのであろうか。ひょっとすると、「それがし覚の候へば、此宿中男残ら

ず御前へ」と申し出たのは采女の方なのではないだろうか。

そのように考える第一の理由としては、西鶴が女性に「それがし」を用いる場合には、その女性が自分以外の誰かになりきる必要があるが、「闇の手がた」の女は別の人になりきる必要もなく、強要されてもいないということが指摘できる。「妖孽寛濶女」の一代女は奉公先の奥方を喜ばせるために、「嗚啞といふ俄正月」の母親は一家を守るために、自分以外の誰かになりきる必要があったのだが、「闇の手がた」の女には、そのような必然性がない。西鶴の浮世草子の用例検討によって、「それがし」を自称に用いる発言主が基本的に男であるのは明らかである。明示こそなされていないが、ここは采女の発話であったと考えるのが自然であろう。

第二に、「それがし」が用いられている発話の後、女が奉行の前に「罷出」ている。もし「それがし」以下が女の発言ならば、一度奉行の前で発言し、その要求通りに木曾の赤鬼たちが連れてこられた後に、改めて奉行の前に出るという動作を描いたことになるが、緊密な場面の描写としてはややちぐはぐな印象を与えるように思われる。むしろ、事前に女から何らかの示唆を与えられた采女が、女の指示通りに宿場中の男を連れてくるよう奉行に申し立て、一同が揃ったときに、采女の後ろに控えていた女が前に出て、初めて決定的な証拠の存在を明かしたとみるのが妥当ではなからうか。

第三に、奉行所という公的な場での発言は、男である采女が行っ

たととる方が自然であるということが挙げられる。現実的に、被害者側の代表として采女がいるのにも関わらず、女が奉行の前に名乗り出て申し立てる必要がないということである。そう考えると、「それがし」の用例検討の結果と矛盾することはない。

以上のことを踏まえると、次のように場面を整理することができるとではないか。木曾の赤鬼らに暴行を受けた采女と女は、夜が明けてから奉行所に向かった。それまでに女は采女と奉行所での対応を打ち合わせていた。暴行を受けたとき、犯人達の背中に鍋炭の形を残しておいたことも当然伝えていたであろう。また、木曾の赤鬼たちが旅中の采女と女の姿を見ていたのであれば、その逆もいえるだろう。正体は不明ながら、自分たちの旅路に怪しげな男たちがいたことについても二人は情報交換できた可能性がある。その上で采女は奉行所で宿場中の男を呼び寄せるように頼む。男達が集まった後、女が「罷出」て昨晚のことを話した。これがことの真相であろう。

五、おわりに

本稿では、西鶴の浮世草子の「それがし」の用例を検討し、その結果をもとに「闇の手がた」の「それがし」について新たな解釈を試みた。西鶴の浮世草子作品において女性が「それがし」を用いる際には、彼女たちに自分以外の誰かを演じるという共通点があるこ

とを確認し、それを踏まえたうえで、「闇の手がた」の「それがし」が各注釈書で女の発言であると捉えられていることに異を唱え、この場面での発言者は今川采女であることを、結論として提示したい。

注

- (1) 西鶴作品の本文引用は、新編西鶴全集編集委員会編『新編西鶴全集』全五巻の本文篇（勉誠出版、二〇〇〇年～二〇〇七年）に依拠した。括弧内に巻数とページ数を示す。なお、振り仮名は省略した。
- (2) 本巻を含む『現代語訳西鶴全集』全七巻の抄出本である同氏『現代語訳日本古典文学全集 西鶴名作集』（河出書房、一九五四年）にも「闇の手がた」が収録される。当該箇所（二七〇ページ）は、「やうに」の仮名遣いを「ように」と改めた以外は同じである。
- (3) 『新編日本古典文学全集 井原西鶴集②』（小学館、平成八年）の現代語訳（宗政氏担当）の当該箇所も同文である。
- (4) 第五巻所収の浮世草子以外の作品にも「それがし」の用例を見ることができ、本稿では検討対象外とした。
- (5) 森耕一氏『好色二代女』巻三四の意味・女奉公人一代女の役割」（『園田国文』一五、一九九四年三月）において述べられているように、この格気講の形式そのものが女たちの嫉妬話の演技性・虚構性を物語っている。

—— おさない・あやの、広島大学文学部平成二十九年卒業 ——